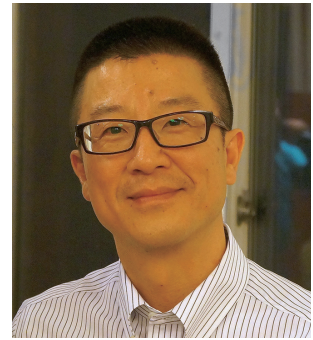


江戸の鳥の美食学

— 環境破壊や乱獲がもたらした野鳥食文化の衰退 —

講師：菅 豊

東京大学東洋文化研究所 教授



ほんの少し前まで、日本列島に住まう人びとは「鳥食の民」であった。こう表現すると、多くの日本人は驚くことであろう。日本において野鳥は、食のみならず政治や経済、社会、儀礼などをめぐって、魚やほかの動物たちには見られないような、複雑で高度な文化の複合体を形作る重要な動物であった。かつて野鳥は、美味なる高級食材であるとともに、大衆料理の食材であり、儲かる商品であり、心のこもった贈答品であり、滋養を保つ薬であり、さらに階級を確認する社会的指標であり、そして政治を動かす道具であった。

本講演では、私たちの先祖がかつて愛した野鳥の味を、いま私たちが忘却するに至った歴史、すなわち日本における野鳥をめぐる食文化の隆盛と衰退の歴史—鳥食の日本史—を辿りながら、野鳥をめぐる食文化の全体像を明らかにする。とくに多彩な野鳥料理が食べられ、その味が庶民にまで届いた鳥食文化の爛熟期である江戸時代の「江戸」を中心に考察する。そこでは、幕府による厳格な野鳥流通システムが整えられ、今では想像できないくらいの種類と量の野鳥たちが消費されていた。しかし近代に入ると、その野鳥食文化は大きく衰退する。

実は、日本における野鳥食文化の衰退の背後では、環境破壊や資源管理の不十分さなどに起因する野鳥資源の枯渇が引き起こされていた。それは、野生動物たちのみならず、人類にとっても由々しき事態であった。野鳥を食べないことは、本来は、日本人が望んで自発的に選択した結果ではない。それは、日本人を取り巻く自然環境の悪化によって、徐々に追い込まれた結果なのである。

多様な生き物を食べることができるのは、多様な生き物が存在して初めて可能となる。自然の生き物を食する文化は、生物多様性を基盤とする生態系から得られる恵み、すなわち生態系サービスによって支えられている。生き物をめぐる食文化が多様であることは、とりもなおさず生物の多様性が健全で豊かであることの証しでもある。そうだとすれば、野鳥を食べられなくなったことは、多様な生き物の存在が脅かされていることの証しだともいえよう。私たちは、多様な生き物たちの食文化を根絶やしにしないために、そしてその多様な生き物たちと人間がともに存在する地球を破滅に導かないために、日本人が経験した野鳥の食文化消滅の悲劇を教訓としなければならないのである。

講師プロフィール

菅 豊 (すが・ゆたか): 筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科中退。博士 (文学)。国立歴史民俗博物館助手、北海道大学文学部助教授などを経て、現在、東京大学東洋文化研究所教授。専門は民俗学。著書に『鷹將軍と鶴の味噌汁—江戸の鳥の美食学』(講談社、2021年) など多数。



日時：令和4年11月5日(土) 13:30～15:00

会場：アビイホール

イトーヨーカドー我孫子南口店3F 千葉県我孫子市若松26-4

主催：我孫子市鳥の博物館・(公財)山階鳥類研究所